



日语汉字音教学之 基础研究

薛华民 著



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社



日语汉字音教学之 基础研究

薛华民 著



WUHAN UNIVERSITY PRESS
武汉大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语汉字音教学之基础研究/薛华民著. —武汉:武汉大学出版社, 2016. 12

ISBN 978-7-307-18746-7

I. 日… II. 薛… III. 日语—发音—教学研究 IV. H361

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2016)第 238407 号

责任编辑:谢群英

责任校对:汪欣怡

版式设计:韩闻锦

出版发行:武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件:cbs22@whu.edu.cn 网址:www.wdp.com.cn)

印刷:虎彩印艺股份有限公司

开本:787×1092 1/16 印张:17.5 字数:412千字 插页:1

版次:2016年12月第1版 2016年12月第1次印刷

ISBN 978-7-307-18746-7 定价:40.00元

版权所有,不得翻印;凡购买我社的图书,如有质量问题,请与当地图书销售部门联系调换。

前言

中国日语学习者相对于其他非汉字圈学习者来说，有着先天的优势——在日语汉字学习方面可以充分利用母语的汉字知识。但是诸多研究表明，原有的汉语知识（会让学习者过分依赖汉字，忽视其他语音、词性等要素）在很大程度上阻碍了日语汉字读音的学习。特别是长音、促音等日语特有的语音现象在现代汉语（普通话）中并不存在，对于中国日语学习者来说这些语音现象很难被准确感知以及习得。另外，日语汉字往往一字多音，这对于以汉语为母语的中国日语学习者来说，也是相当的困难。

对于以上的一些问题以及困难，尽管很有必要进行适当指导加以解决，可至今仍然很少有与此相关的系统研究。现如今中国日语教学当中，汉字音的学习基本上都是由学生自己来进行（主要是死记硬背），教师除了领读之外基本上不作讲解，因而中国日语学习者的汉字音问题自始至终没有得到解决，也没有解决的征兆。在这样的背景之下，如何系统有效地进行日语汉字音教学指导就显得非常有必要。本书在诸多专家的研究基础之上，围绕中国日语学习者的汉字音学习问题，着眼于利用汉语知识，系统研究能够在中国日语教学中加以运用的日语汉字音教学指导方法以及对策。

第一章主要就研究背景、研究目的以及术语定义进行展开。第二章根据二语习得理论整理了迄今为至与二语习得过程中第一语言之影响相关的研究以及见解。第三章通过问卷调查确认了本研究的前提——中国日语学习者在看到日本汉字时会激活母语相关知识，由于存在差异，也不尽相同。第四章分别从声母以及韵母两方面出发全面考察了中日汉字读音的音韵对应规律，结果显示除了一部分入声字对应规律非常明显。第五章为了弥补第四章的不足，专门就入声字的识别以及与中文汉字音的音韵对应关系进行了分析和考察。第六章就长短音的区别进行了讨论，提出了适用于中国日语学习者的长短音学习方法。第七章就同音字问题进行展开，分别讨论了一字多训（训读），一字多音（音读）两个方面的问题，提出了有效的区别读音的方法。第八章比较了数个权威的日语汉字表，根据中国日语学习者的特性选取了适合中国日语学习者的汉字列表和制表注音，并注明是否入声字等信息。第九章对本书进行了总结，指出了不足之处以及今后的研究方向。

尽管本书还有不完善的地方，还希望前辈和同仁通过本书的研究能够对汉字音教育产生兴趣，更希望通过抛砖引玉，期待将来有更多的相关研究问世。另外，本书的编写和出版还得到了桑山哲郎先生以及武汉大学出版社谢群英编辑的鼎力相助，在此一并表示感谢。

编者

2016年8月

序 文

著者は南京大学修士課程を修了した後「中国国家建設高水準大学公費派遣研究生（博士）」を得て、九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻に編入学し、2013年に博士の学位を取得しました。その学位申請論文を修正し書籍として出版に至ったことは、かつての指導教員としても大変喜ばしいことです。

薛華民氏は博士課程において、これまで日本語教育において軽視されてきた中国語を母語とする日本語学習者の漢字の読みを研究対象とし、日本の常用漢字リストについて中国語読みと日本語音読みの対応関係を詳細に分析し、いくつかの興味深い規則性を発見しています。この成果は中国人日本語学習のための音読み指導の基礎となる貴重な研究であります。

数千もの漢字の読みの対応を調べるという作業は、大変根気のいる作業であり、現代の研究者はコンピューターに頼ることも多いと思います。薛華民氏は、一つ一つの対応を丹念に確認していくことによって見えてくるものがあり、人文学における基本的な研究方法の大切さを改めて示してくれたと思います。この研究が実を結んだことはまた、氏の真摯に漢字に向き合う研究方法、研究態度の成果でもあります。

中国語を第一言語とする日本語学習者は非漢字圏の日本語学習者と比較し、漢字学習において母語（漢字）の知識が活用できる反面、中国語の知識が日本語の漢字音学習を阻害する場合もあることが多くの研究により明らかになっています。また、長音や促音など日本語の特殊音声は現代中国語（標準語である「普通話」や多くの方言）には存在しないため、学習者にとって、その音声上の知覚が比較的困難であり、習得しにくいことが分かっています。さらに、一つの漢字に複数の読みがあること、すなわち漢字の多読性による困難も多くの研究により指摘されています。

本書はそういった問題に対応するための漢字の読み方指導に関する研究の基礎となるものであり、全九章から構成されています。第一章において研究背景と研究目的などの研究概略および用語の定義を示した後、第二章において、第二言語習得における理論的根拠をふまえ、外国語（第二言語）学習における第一言語の影響と第二言語学習における語彙習得に関するこれまでの知見を整理しています。第三章では、中国語を第一言語とする学習者が日本語漢字を見て中国語の知識を想起できるという本研究の前提の成立を確認するために行った、質問紙調査の結果を示しています。このように、本書は単なる漢字の読みの対応を確認するのではなく、第二言語習得の理論や先行研究に基づいて研究課題を設定し、研究の前提となる事項を実証したうえで、漢字音の対応という本題に取り組んでいることは高く評価できます。

本書の中心となる第四章から第七章において、中国語と日本語の漢字音の対照研究によって、中国語の発音を手がかりに日本語漢字音の記憶や推測ができる対応規則を見つけ出し、また、学習上の困難点となる、入声字、長音・単音、日本語における漢字の複数の読み方、などの問題に対する具体的な解決策を提案しています。

さらに、第八章において、中国の日本語教育における漢字の選択状況、日本語教育一般における漢字の選択状況、日本社会の漢字使用状況などを踏まえ、学習者に適した学習漢字を選出し、読み方の整理を行って漢字表を作成するに至っています。最後の第九章では、それまでの内容を要約し、本書の結論として漢字読み方指導への提案をまとめています。

このように本書は、中国語を第一言語とする日本語学習者向けの研究の中で重要な研究であります。つまり、学習者にとって適切な漢字の読み方指導の必要性が認識されているにもかかわらず、その対策のための研究がほとんど公開されていなかったという不足を埋めるものであります。本書の基となった博士論文の公開審査においては、この点を言語学および言語教育学を専門とする調査委員全員が高く評価しました。

もちろん本書は中国語を第一言語とする学習者が直面する漢字読み方に関するあらゆる問題を網羅的に分析し解決案を提供するというものではありません。しかしながら、学習者向けの漢字教育に有効な示唆を提示するという点で中国語を第一言語とする日本語学習者の漢字教育の研究と実践における重要な貢献であることは間違いありません。さらに、韓国やベトナムなどにおいても漢字知識を有する学習者を対象とした研究へと発展していくことも期待できます。

本書が多くの人々の中国語を第一言語とする学習者の漢字の読み方の能力向上に大きな助けとなることを願います。また、薛華民氏の今後のさらなる研究と実践に期待し、本書が、日本語と中国語の漢字音の研究や漢字学習方法の研究の発展に寄与することを願います。

井上奈良彦

2016年8月

目 次

第1章 序論	1
1.1 研究背景と目的	1
1.2 研究方法と用語の定義	2
1.2.1 研究方法	2
1.2.2 用語の定義	3
1.3 構成	5
第2章 先行研究の概観及び本研究の研究課題	7
2.1 はじめに	7
2.2 第二言語（L2）の学習における母語（L1）の影響	7
2.2.1 L1がL2の学習過程に介在する理論的根拠	7
2.2.2 第二言語習得（SLA）におけるL1の影響	8
2.3 L2の学習における語彙習得	10
2.3.1 語彙知識の構成要素	10
2.3.2 語彙習得と心内辞書	12
2.3.3 心内辞書の構築	12
2.3.4 単語の処理過程	13
2.4 中国語 L1 学習者による漢字語彙の処理	14
2.4.1 漢字情報処理の流れ	14
2.4.2 漢字語の音韻処理	15
2.5 中国語 L1 学習者のための漢字読み方指導	16
2.5.1 中国語 L1 学習者による漢字読み方学習の問題	16
2.5.2 中国語 L1 学習者のための漢字読み方指導について	17
2.6 本研究の研究課題	19
2.7 おわりに	21
第3章 中国語 L1 学習者による日本語漢字の同定	22
3.1 はじめに	22
3.2 調査方法	22
3.2.1 調査対象者	22
3.2.2 調査材料	23

3.2.3 調査計画及び統計分析	23
3.2.4 手続き及び判定基準	24
3.3 調査結果	24
3.3.1 日本語レベルおよび提示形式による正答率（同定率）	24
3.3.2 異形度ごとの正答率	25
3.4 考察および推論	26
3.5 おわりに	27
第4章 中日漢字音の音韻対照	28
4.1 はじめに	28
4.2 中日両言語の漢字音の音節構造	28
4.2.1 中国語の漢字音の音節構造	28
4.2.2 日本語の漢字音の音節構造	30
4.3 調査方法	30
4.3.1 対照項目及び調査手順	31
4.3.2 調査対象となる漢字	32
4.4 結果と考察	33
4.4.1 声母と頭子音との対応関係	33
4.4.2 韻母と母音部との対応関係	36
4.5 おわりに	41
第5章 入声字の識別（特定）	42
5.1 はじめに	42
5.2 入声と入声字	43
5.3 入声字に関する表記・分布調査	43
5.3.1 入声字の日本語音表記	43
5.3.2 入声字の中国語韻母別の分布	46
5.4 考察—入声字の識別（特定）	48
5.4.1 中国語音節要素による識別（特定）	48
5.4.2 音節要素以外の識別（特定）方法	51
5.4.3 まとめ及び入声字識別（特定）の意義	58
5.5 おわりに	60
第6章 字音語における長音・短音の弁別及び学習	62
6.1 はじめに	62
6.2 問題提起	62
6.2.1 字音語における長短音の混同とは	62
6.2.2 長短対立の音節ペア	63

6.2.3 長短音の混同の理由	64
6.3 長短音に関する漢字の音韻対照	66
6.3.1 調査方法	66
6.3.2 音韻対照の結果	66
6.3.3 考察	68
6.3.4 まとめ	71
6.4 中国語の声調特徴に基づく長短音学習への提案	72
6.4.1 調査①-第三声音節と第四声音節の持続時間に関する調査	72
6.4.2 調査②-第三四声音節と第四声音節に対する知覚に関する調査	74
6.4.3 総合考察および提案	75
6.5 おわりに	76
第7章 漢字の読み分け	77
7.1 はじめに	77
7.2 漢字の多読性と漢字の読み分け分類	77
7.2.1 漢字の多読性	77
7.2.2 漢字の読み分け分類	79
7.3 音音読み分け	79
7.3.1 調査方法	80
7.3.2 読み出現の調査結果	80
7.3.3 考察	89
7.3.4 まとめ	95
7.4 音訓読み分け	96
7.4.1 調査方法	96
7.4.2 漢字語の分類	96
7.4.3 考察	97
7.4.4 まとめ	100
7.5 おわりに	101
第8章 中国語 L1 学習者のため学習漢字の選択	102
8.1 はじめに	102
8.2 中国の日本語教育における漢字選択	102
8.2.1 「大学日本語科低学年段階教育要領」にて規定される漢字	102
8.2.2 中国の日本語教科書・テキストにおける漢字	104
8.2.3 まとめ	105
8.3 日本社会における漢字の使用状況	106
8.3.1 常用漢字	106
8.3.2 新聞・放送用字	107

8.3.3	高等学校までの学校教育漢字	107
8.3.4	まとめ	108
8.4	日本語教育分野における漢字の選択	109
8.4.1	日本語能力試験出題基準	109
8.4.2	徳弘（2006）の日本語学習のための2100字	109
8.4.3	日本語学習者向けの一般的漢字教材における漢字選択	110
8.4.4	まとめ	111
8.5	漢字データの統合及び漢字選択	111
8.5.1	選択対象となる漢字群	111
8.5.2	漢字の選択およびレベル分け	112
8.5.3	漢字表の作成および新「常用」と教育漢字などとの照合	113
8.5.4	新「常用」、『出題基準』と教育漢字などとの照合	114
8.6	おわりに	115
第9章	結論と今後の課題	116
9.1	各章のまとめ	116
9.2	研究意義	118
9.3	今後の課題	120
参考文献		122
付録 A	日本語漢字の同定調査用紙	132
付録 B	中国語の基本音節表	133
付録 C	常用漢字における音読みの出自統計	141
付録 D	中国人による中国語発音調査用紙	182
付録 E	中国語音声のスペクトログラム	183
付録 F	日本語 L1 話者による音声知覚調査用紙	190
付録 G	中国語 L1 学習者のための学習漢字表	192
付録 H	漢字選択から外された漢字	266

図表一覧

図 2-1	漢字情報処理の流れ	14
図 4-1	中国語の音節構造	29
図 4-2	現代中国語の声調の記述	29
図 4-3	頭子音/k/と/g/	35
図 4-4	頭子音/t/と/d/	35
図 4-5	頭子音/s/と/z/	36
図 6-1	ピンイン読みの音節構造と音読みの音節構造	65
図 7-1	概念、言葉及び漢字三者の関係（一）	78
図 7-2	概念、言葉及び漢字三者の関係（二）	79
図付録 C-1	常用漢字における音読み出自の統計	141
図付録 C-2	複数音漢字の音読み対立統計	141
図付録 E-1	元の録音したデータ	183
図付録 E-2	処理を加えたデータ	183
表 2-1	語彙知識の構成要素	10
表 3-1	調査対象者の内訳	23
表 3-2	日本語レベル別の正答率（単字/熟語）	24
表 3-3	異形度ごとの成績	25
表 4-1	中国語の韻母表	30
表 4-2	対照項目（一）	31
表 4-3	対照項目（二）	32
表 4-4	声母と頭子音の対応関係	33
表 4-5	/-n/ 韻母と母音部との対応関係	36
表 4-6	/-ng/ 韻母と母音部との対応関係	37
表 4-7	/-i/・/-u/・/-o/ 韻母と母音部との対応関係	38
表 4-8	無韻尾の韻母と母音部との対応関係	39
表 5-1	入声字の日本語音表記	44
表 5-2	中古中国語における韻母分類	46
表 5-3	陽声韻と入声韻の対応関係	46
表 5-4	入声字の韻母別の分布	47
表 5-5	キ表記のある漢字の韻母別統計	48

表 5-6	各韻母における非入声字と入声字	49
表 5-7	同音符の入声字	52
表 5-8	音符を利用して識別（特定）できた漢字	53
表 5-9	無韻尾の韻母と母音部との対応関係（旧）	58
表 5-10	無韻尾の韻母と母音部との対応関係（新）	60
表 6-1	理論上の長短対立音節ミニマルペア	63
表 6-2	字音語に現れる長短対立音節ミニマルペア	64
表 6-3	各韻母の日本語の転写	66
表 6-4	韻母の分類	68
表 6-5	他の韻母の日本語転写状況	69
表 6-6	例外となる漢字	70
表 6-7	中国語 L1 話者による音声の持続時間（ms）	73
表 6-8	中国語 L1 話者による第三声と第四声の持続時間の比の値	74
表 6-9	日本語 L1 話者による第三声音節と第四声音節の知覚結果	75
表 7-1	常用漢字表における音訓数別の分布	78
表 7-2	音読みの出現状況による分類	81
表 7-3	一つの音読みしか現れていない漢字	81
表 7-4	一つだけの読みの語例が圧倒的に多い漢字	84
表 7-5	中国語発音による読み分け	90
表 7-6	意味による読み分け	90
表 7-7	語中の位置による読み分け	92
表 7-8	語中の位置による部分的読み分け	93
表 7-9	漢字語の分類	96
表 7-10	一字漢字語の音訓読み分け	98
表 7-11	二字漢字語の音訓読み分け	99
表 7-12	三字漢字語の音訓読み分け	100
表 7-13	非音読みの四字以上の漢字語	100
表 8-1	語彙数と漢字数の相対比率	103
表 8-2	『新編日語』における漢字の統計	105
表 8-3	各新聞社の用字	107
表 8-4	一般漢字教材における漢字選択	110
表 8-5	選択対象となる漢字群の内訳	112
表 8-6	中国語 L1 学習者のための学習漢字表（一部）	114

第1章 序 論

1.1 研究背景と目的

1990年代後半より、日本の経済成長率が下降し続ける一方で、中国では十数年に渡る日本語ブームが今日まで続いている。日本語学習者数も日本語教育機関数も右肩上がりで上昇し続け、日本国際交流基金が2009年度に実施した「2009年海外日本語教育機関調査」の結果によれば、中国大陸の日本語学習者数は約83万人となり、その人数は韓国に次いで世界で2番目である（ただし、台湾及び香港の学習者を加えると、韓国を超えて1位となる）。とりわけ、高等教育段階の学習者数は世界1位であり、その数は53万人にも達する。学習者数の急増加の背後には様々な要因が潜んでいると考えられるが、無視できない理由の一つとして、筆者は日本語には中国人にとって馴染み深い「漢字」が多用されていることを挙げる。

一見すると、中国語を第一言語（以下、L1）とする日本語学習者（以下、中国語L1学習者）は、L1で漢字を使わない日本語学習者（以下、非漢字L1学習者）と比較し、学習にかかる物理的・心理的負担が小さいと考えられる。なぜなら、日本語の漢字語学習において、母語（漢字）の知識が活用できるからである。ところが、負担が小さいからといって、漢字語のすべての面において非漢字L1学習者より習得が早いわけではない。実は、漢字音の学習について、中国語L1学習者は、多くの問題を抱え非漢字L1学習者よりも定着が遅いことがこれまでの研究により明らかになっている（加納1994、中村2009など）。この矛盾とも言える事態は、まさに中国語（漢字）知識と深く関わっている。漢字語を認知する際に、非漢字L1学習者は母語から干渉を受けないように、音韻情報を積極的に活用するのに対し、中国語L1学習者はつい視覚情報に大きく依存してしまい（Chikamatsu1996、邱2003b、大神2008など）、特に同根語の場合、音韻を媒介せず、形態から意味への直接処理をするか、あるいは中国語の音韻を媒介するルートが取られるとされている（邱2002）。よって、中国語L1学習者は非漢字L1学習者と比較すると、あまり漢字語の音韻情報に注意を払わないため、漢字語の形態（字形）と音韻（読み）の連結度がかえって弱く、漢字音の定着も遅くなるのだと推察できる。

また、長音や促音などの日本語の特殊拍は現代中国語（標準語である「普通話」や多くの方言）には存在しないため、多くの中国語L1学習者にとって、その音声上の知覚が比較的困難で、なかなか定着しにくい（内田1993、栗原2005や賈・森・柏

谷 2006)。したがって、これらの特殊拍に関連する習得も難しくなるのである。さらに、一つの漢字に複数の読みがあること、すなわち漢字の多読性による困難性も多くの研究（加納 1995、原野 1995、姫野・余 1996、郭 2006、大神・清水 2008 など）により指摘されている。

以上に述べたように、中国語 L1 学習者による漢字音学習の問題や困難が存在しているからこそ、中国語 L1 学習者向けの適切な漢字読み方指導を行わなければならない。ところが、これまで体系的に漢字音問題対策・漢字音指導方法を講じる研究は、ほとんどむないと言っていい。中国の日本語教育現場においても、漢字ないし漢字音の学習は相変わらず学習者自身に任せられ、教師側から軽視されたままであるため、問題解決に向けた動きが一切見えず、改善の見込みが見られない。そのため、近年では漢字の読み方について体系的な指導が求められているようになっている（加納 2007、中村 2009）。

また中村（2009）は以下の8点について、総合的に指導するのが有効だと指摘した。

①総漢字数、②音訓読みシステム、③漢字の音（読み方）は基本的にどの組み合わせにおいても同一であること、④初級の漢字には複数読み方のあるものが多いこと、⑤音読みしかない漢字も多くあること、⑥促音化や連濁によって音が変化することとその規則、⑦漢字の組み合わせによって音の長短は変わらないこと、⑧中国語漢字音やシステムと対応しないこともあるが、形声文字の知識が使用可能であること。

本研究では、先行研究の知見に基づいて、中国語 L1 学習者による漢字の読み方の学習の主な問題をめぐり、漢字の読み方の指導法開発のための中国語（漢字）の知識の利用に着目する。そして、中国の日本語教育現場で運用可能な体系的な対策を立てようと試みるものである。けれども、本研究は中国語 L1 学習者によるすべての漢字音学習問題を網羅的に分析し、解決案を提供しようとするものではない。本研究を通じて、少しでも中国語 L1 学習者向けの漢字読み方教育に有効な示唆を提示することを目指すものである。すなわち、本研究で挙げられたデータや結果から直接漢字の読み方指導法を考案するというより、その指導法を構築するための土台を作るための基礎的研究を行うことを大きな目的とする。

1.2 研究方法と用語の定義

本節では、本研究における研究方法と、定義が定まっていない用語の概念について、誤解を避けるためにもあらかじめ筆者なりの定義を示す。

1.2.1 研究方法

本研究は漢字情報処理に関する認知心理学の知見に基づき、漢字読み方の学習に L1 知識の利用を取り入れようと試みる。けれども、漢字読み方指導法そのものを示すものではなく、漢字の読み方の指導法開発に向けて、効率的な漢字の読み方の習得

を目指す基礎的研究にあたる。具体的な研究方法は、まず①アンケート調査を通じ中国語 L1 学習者による日本語の漢字の同定（日本語漢字と対応する母語の漢字を特定すること）が可能かどうかを明らかにする。そのうえで、②常用漢字表の範囲で、対照研究の手法をもって中日漢字音の対応関係を整理し、中国語の発音を手がかりに（中国語発音から）日本語漢字音の記憶や推測などができるようにしていく。次に個別の問題に関して、③入声字音①については、まずそれらと密接な関係を持つ入声字の概念を導入し、同じ対照研究の手法で対照を行ったうえで、中国語（漢字）知識による入声字識別方法を提案する。④長短音の学習については、対照研究から得られた中日漢字音の対応関係に基づき長音と短音の「境界線（韻母の違い）」を見出した後、声調の特徴（実験・調査で明らかにする）を利用する長短音の学習方法を提案する。⑤複数音の問題については、主に漢字語データベースを利用し調査を行う。調査の結果より、音読みが複数ある漢字の読み分け方法と音訓の読み分け方法を提案する。最後に、⑥中国での日本語教育における漢字の選択状況、一般日本語教育における漢字の選択状況、日本社会の漢字使用状況などに関する文献調査を行ったうえで、中国語 L1 学習者に適した学習漢字を選出し、音訓整理を行う。

1.2.2 用語の定義

中国語（漢字）の知識

中国語の知識といっても、語彙、発音、文法の様々な面を持っているが、本研究は漢字音を扱うため、本研究においては、主にそれに関わる中国語の漢字知識を取りあげる。中国語の漢字には発音（読み）、意味、形態（字形）という三つの要素があり、意味と形態は基本的には多くの方言に共通している（広東語における一部の漢字などは例外）が、発音だけは方言間で大きな差が出ている。学校教育を受けた中国人のなかには、漢字について、標準語（「普通話」）の発音だけでなく方言の発音も身につけている人が少なからず存在するが、ほとんどの方言には音表記（ローマ字）がないため②、基本的には、中国人が漢字を見て想起する音表記は標準語の音表記（ピンイン③）だけだと言える。したがって、本研究で言う中国語（漢字）の知識は主に中国語 L1 学習者が想起できる漢字に関する音表記（ピンイン）、意味および形態などのことを指す。

中国語 L1 学習者

現代中国語は標準語（「普通話」）以外に、一般的には「北方方言、呉方言、閩

① 入声字は、中古中国語の四声の1つの「入声」を有し、韻尾は/ʌ・/p・/k/のいずれかで終わる漢字を指す。これらの漢字は現代日本語においては、その音読みが「ク/キ/ツ/チ/ウ」のいずれかで終わる。本研究ではこれらの日本語の音読みを入声字音とする。詳しくは第5章を参照されたい。

② ローマ字表記を持つ方言も（粵語や呉語など）あるが、あまり普及していない。

③ 中国の発音の表記形式として中国大陸で使われているもの。

(ビン) 方言、粵方言、贛(カン) 方言、湘方言、客家方言」という7つ方言に分けられる(詹2000: 63)。各方言の中では標準語に近いものもあれば、標準語話者とはまったく意思疎通が不可能に近いものが存在する。上述のように、標準語に基づいた漢字知識を利用するため、学習者の方言を区別せず標準語を話せる者を中国語 L1 学習者とする。さらに、中国語(漢字) 知識を利用して検討を進めるため、主に言語知識も認知能力も熟達した成人学習者に限定した。つまり、本研究の中国語 L1 学習者は中国語標準語知識も認知能力も熟達した日本語学習者のことを指す。

漢字語、字音語、漢字音と漢字の読み方

現代日本語の語彙には、和語・漢語・外来語など出自が異なる語種がそれぞれ存在する。ここで言う「漢語」とは、中国語から借用した語彙に加え、日本で造語された語彙を含むいわゆる「字音語」のことを指す。(文化庁 1983、野村 1999、松村 2006など)。

一方、「漢字語」という概念は漢語に近いが、同じものではない。鈴木(1968)は漢字語を「概念をともなった語としての漢語と訓に対する表記としての漢字の両方を含んだもの」と定義する。また、そのことに対し、山田(1978)は従来の漢語(由来が中国のものも和製のものも含む)と「木綿(もめん、きわた、ゆふ)」のような読みにゆれのある漢字の熟語なども一括して漢字語と名付ける。更に、陳(2009)は漢字で表記される語のなかで、音読みで読むものを漢語、音読みで読む以外の語を漢字語としている。本研究では、音読みの漢語のみならず、訓読みの語も考察対象となるため、考察の際に混乱が起こらないよう、読みの音訓や送り仮名の有無などを問わず、漢字表記が入っている語を統一してすべて「漢字語」とする。また、その一部となる音読みの漢字語を、中国語を指す漢語と区別するため、「漢語」ではなくて「字音語」とする。ただし、引用の場合は原文のままにする。

「漢字音」については、松村(2006)では「中国における発音に基づき日本で行われている漢字の読み方で、伝来の時期などにより、呉音・漢音・唐音などに区別される」と定義され、字音(音読み)と同じような意味である。本研究では、この定義に従う。ただし、字音(音読み)と字訓(訓読み)を統括している場合、「漢字の読み方」と言う。

習得と学習

Krashenの「習得/学習仮説(Acquisition-Learning Hypothesis)」において、「習得」と「学習」は区別されている。「習得」は、インプット中の意味を処理する過程で潜在意識的に起こるものだと見ている。一方、「学習」とは、意識的に言語の規則を学ぶもので、従来の学校の文法中心の言語教育をさしていた(小柳 2005: 63)。ところが、実際の第二言語習得過程の中で両方が並行する場合も決して少なくない。その場合、第二言語の認知過程を支える知識が習得されたものか学習されたものかを確認することはかなり難しい(海保・柏崎 2002: 109)ため、本研究では、断りがない場合「習得」と「学習」を同じ意味で使用する。

1.3 構成

本研究は以下の9章から構成されている。

まず、第1章（本章）の序論では、研究背景、研究目的、研究方法および用語の定義を示す。

第2章では、本研究の理論的根拠及び研究課題を導くために、まず、L2の学習におけるL1の影響を論じる。次に、L2の学習における語彙習得に関する知見を整理する。とりわけ、学習者の心内辞書（Mental Lexicon）の構築・アクセスの過程を概観する。そして、中国語 L1 学習者による漢字音韻の処理について、先行研究をまとめ、本研究の扱う漢字音学習に対する示唆を導出する。最後に、中国語 L1 学習者による漢字音学習の問題を整理し、また提案された指導法及び残された課題を踏まえ、本研究の研究課題を提示する。

第3章では、アンケート調査を通じ、中国語 L1 学習者による日本語漢字の同定（日本語漢字と対応する母語の漢字を特定すること）状況を明らかにする。つまり、中国語 L1 学習者が日本語漢字を見て中国語知識（読みと意味）を思い出せるかという本研究の前提の成立を検証していく。また考察から得た結果に基づき、漢字音教育ないし漢字教育に対する示唆について考察する。

第4章は、常用漢字表の範囲で、中国語に存在する音読みのある漢字について中日の音韻（中国語発音と日本語音読み）対照研究を行う。具体的には、中国語発音の「声母」と「韻母」を日本語音読みの「頭子音」と「母音部分（頭子音以外の部分）」との対照分析を行うことで中国語発音と日本語音読みの対応関係を整理し、中国語の発音を手がかりに日本語の音読みの記憶や推測などができるような規則を見つけ出す。

第5章では、第4章で得られた一部の複雑な音韻対応関係の簡素化に対する検証と促音の学習に深い関係を持つ入声字音の学習に寄与するための入声字の識別（特定）方法を考察する。まず、中国語音節知識を利用した入声字識別（特定）方法を検討する。さらに、形声文字の音符と漢字の押韻規則を用いた方法を加えて、入声字の識別（特定）方法についてまとめる。

第6章では、中国語 L1 学習者がよく混同する字音語における長短音をめぐって、まず中国語発音の「韻母」部分と日本語の「転写」との対応関係に基づいた長短音の判別方法を検討する。そして、中国語の声調知識を利用した長音・短音の産出方法を提案する。

第7章は、複数漢字音のある漢字の読み分け問題を中心に、「音音」（音読みが複数ある漢字）の読み分けと「音訓」（音読みと訓読みがともにある漢字）の読み分けに分けて考察を進める。「音音」の読み分けの部分では、漢字の中国語発音、漢字の意味、漢字の語中位置などの手がかりを使って読み分ける方法を考察する。一方、「音訓」の読み分け部分では漢字語の漢字字数、仮名の有無、漢字もしくは漢字語の